

# ～スギ林を保育する～

## ◆那珂市は、スギとともに歩んできたまち

### Q. スギってどういう木？

スギは、日本固有種の常緑針葉樹で、学名を「クリプトメリア・ジャポニカ」といい、“隠された日本の財産”という意味があります。スギは今から200万年前には日本に出現し、縄文・弥生時代にはすでに全国に広く分布していました。スギは古い時代から優秀な材木として生活の中で活用されてきた、世界に誇れる日本独自の歴史的な文化財と言えます。



### Q. スギという名前の語源は？



- ①“真直ぐの木「直木」とする説（貝原益軒「大和本草」）
- ②“傍らにはびこらず上へ進み上る木として「進木（ススギ）」とする説（本居宣長「古事記伝神代七之巻」）という2つの説があります。

### Q. 那珂市とスギにどういう関係があるの？

那珂市には多くのスギ林があり、推定年齢が500年のスギの巨木（天然記念物）も3樹あります。市内には、徳川光圀（水戸黄門）の時代に名前をもらったと言われている“杉”という地名が今も残っており、戦後はスギの造林用苗木の生産地として全国的に有名になりました。



## ◆那珂市とスギの歴史

スギは、昔から寺社仏閣を建立あるいは修造に使用するため、寺社仏閣の周辺に植林が行われていました。市内でスギ林が寺社内に多く見られるのはそのためです。那賀郡（那珂地方）においては、苗木の植林や伐採など、林業らしきことは平安時代には始まっていたようです。

平安時代（866年）に編纂された歴史書「日本三大実録」には、“鹿島神宮惣六箇院は、20年間に一度修造を加えるが、そのための用材五万余枝を伐採する山は、那賀郡内にある”との記載があります。これによって、那賀郡内にかなり広大な鹿島神宮の用材林があったことがわかります。

江戸時代には、水戸藩は御立山という藩有林を持っており、植林を行っていました。植林をしていくうえでの苗木が不足した場合には、他村に苗木を求め、当時苗木の特産地であった鴻巣村と杉村から不足分の苗木を購入しました。さらにこの時代には、苗木の植採や伐採だけでなく、製材・出荷も行われました。

那珂町苗木は、明治中期から杉、横堀、堤、中宿、上宿などで広く生産されるようになりました。終戦後、茨城県は全国第1位のスギの苗木産出県となり、那珂町はその中心的生産地となりました。昭和50年度的那珂町のスギの生産量は約350万本、売上高は約1億3000万円で、ともに、県全体の70～75%と推定されました。



※参考文献…「那珂町史—中世・近世編」と「那珂町史の研究第7巻久保田喜一著“古代における那珂町周辺の産物について”」「河本幸郎著茨城の産業—その歴史をたどって」

## ◆スギ林による二酸化炭素 (CO<sub>2</sub>) の吸収

植物は、太陽の光によって光合成を行い、地球温暖化の原因である二酸化炭素を吸収し酸素を排出します。樹木が吸収し蓄積する二酸化炭素量は一本一本違ってきます。右下のグラフは、樹種別に林齢とともに1年間に1ヘクタールあたりの炭素吸収量がどのように推移していくかを示しています。

### Q. 右のグラフからわかることは？

- ①スギやヒノキなどの針葉樹の方が、ブナやクヌギなどの広葉樹よりも植林後の50年間の二酸化炭素の吸収量のはるかに大きく、特にスギがその能力が高い！
  - ②林齢11~40年までの若い木が二酸化炭素をよく吸収する！
- ということが読み取れます。

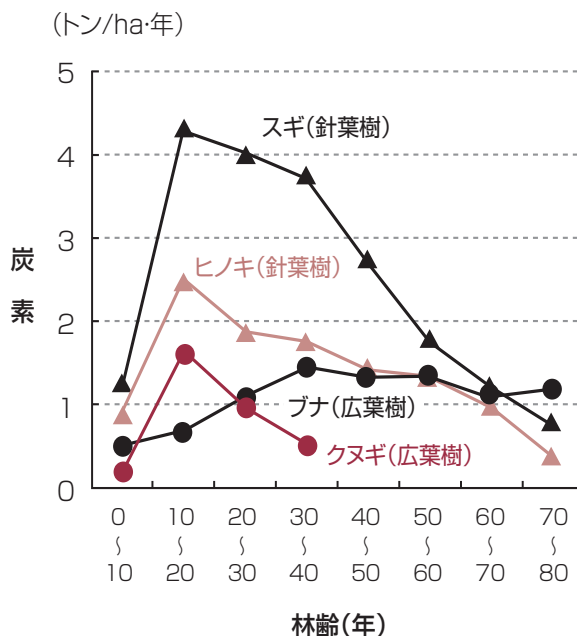


### Q. 吸収量は実際どれぐらいなの？

- ①自家用乗用車1台から1年間に排出される二酸化炭素量=80年生のスギ人工林0.3ヘクタール(スギ約160本)の年間吸収量と同じくらいです。
- ②1世帯から1年間に排出される二酸化炭素量=80年生のスギ人工林0.8ヘクタール(スギ約460本)の年間吸収量と同じくらいです。



樹種別・林齢別炭素吸収量



※「森林・林業白書(平成16年度)林野庁編」より

## ◆スギ林が地球温暖化防止の救世主となるために

森林は光合成によって二酸化炭素を吸収しますが、ただ植林して見守っているだけでは、温暖化防止に貢献する森林にはなりません。「下草刈り」や「間伐」などの保育を行う必要があります。保育を行うことにより、二酸化炭素の吸収量も増大します。

### しかし現実はいかに

日本は国土の67%が森林であるにもかかわらず、木材の自給率はわずか27.9%(平成24年林野庁「木材需要表」より)にとどまっています。昭和30年代後半から木材輸入が自由化されて以降、世界中から木材を輸入しています。それに伴い、国内の林業は衰退し、森林は放置され、荒廃が目立つようになりました。

さらに、先人たちが植林し保育してきた木々は、現在収穫期(利用適齢期)を迎えています。今、国内の木を伐って、使って、若い木を植えておかないと次世代に森林資源を残せなくなります。そして、植えた若い木に二酸化炭素をたっぷり吸収してもらうことが持続可能な森林の保護・育成であり、地球温暖化防止につながるのです。

### 国による課題解決

林野庁では、国産材の積極的な利用を通じて森林を活性化する(=二酸化炭素をたっぷり吸収する元気な森林づくり)ことにより、課題解決に取り組んでいます。その一つが、一般市民や企業など、消費者に向けた国産材の利用促進・PR活動である「木づかい運動」です。木づかい運動を促進するために、林野庁ではロゴマークを制定しています。右の図は「木づかいサイクルマーク」といい、このロゴマークは国産材製品であることを証明するものです。

